

木を植えた高僧たちの伝説

いつ、どこに、何の木を、なぜ植えたのか

部 矢 祥 子

はじめに

歴史上の人物と植物のかかわりを調べる時、僧侶に植物伝説が多いことに気づく。

たとえば、行基を甲州葡萄の発見・栽培者とする話、空海が麦の種を、足を裂いて隠し入れ唐から持ち帰った話、親鸞の片葉の葦（葉を一方にのみつける葦）が、今も居多神社（上越市）に群生する話、円爾が茶の実を宋から持ち帰り、生誕地（静岡市）に蒔いた話、日蓮が清澄寺（鴨川市）で激しい修行後に吐血し、今もその場所に黒い斑入り（飛び散った血の跡）の笹が生える話、等海上人が王禪寺（川崎市）の山中で甘柿を発見し、村人に接ぎ木で栽培させ

た話、元政上人が、病の時は竹の香を嗅ぎ葉のそよぎを聞いておれば必ず治ると言った話などがある。

中でも多いのが「お手植え伝説」で、高僧が何らかの木を植えた話である。しかも、彼らが植えたと伝わる樹齢何百年もの木が、日本各地に生育しているのである。しかし、これまでお手植え伝説は注目されてこなかった。⁽¹⁾ 高僧、植物、伝説は個別に研究され、各々の研究成果は膨大に蓄積されているが、高僧と植物と伝説を結び付けた研究は見られない。⁽²⁾

本稿は、全国を対象に古代から近世の高僧が植えたと伝わる樹木の事例を集め、いつ、誰が、何の木を、どこに、なぜ植えたと伝わっているのかを調査し、高僧と樹木の関係を明らかにする。⁽³⁾

高僧のお手植え伝説とその樹木は、『日本伝説大系』（みずみ書房、一九八二年）をはじめ諸文献^④、及び各寺社のホームページ、観光案内パンフレット、樹木の前に掲げられた高札・案内板の記述、フィールドワークなどに拠り収集した。

一、お手植え伝説はどの人物にまで遡るか

伝説上初めてお手植えをしたのは誰か

お手植え伝説を、高僧に限定せず調べて見ると、聖徳太子（五七四―六二二）に五つの伝説がある。彼が植えたと伝わる樹木と、その木がある場所を記すと、①サクラ（世尊寺、奈良県大淀町）、②マツ（府南寺、三重県鈴鹿市）（妙安寺、茨城県坂東市）、③ハナノキ（長光寺、滋賀県近江八幡市）、④ウメ（正法寺、愛知県豊川市）である。

植えた木は四種。場所は五か所で、いずれも聖徳太子創建の寺とされる。③のハナノキは、寺建立の証として植えた^⑤と伝わる。

遡って、神武天皇（前七一―前五八五）は、①イチヨウ（宮浦宮、鹿児島県霧島市）、②ビヤクシン（枚岡神社、

大阪府東大阪市）、③ケヤキ（奈良県吉野郡大淀町）、④スギ（櫻實神社、奈良県宇陀市）を植えた^⑥と伝わる。

神武天皇の植樹は、東征伝説に関連している。すなわち①は、天皇が仮住まいをしていた地で、イチヨウは東征出發時に植えた^⑦と伝わり、②は、国土平定を目指して日向国から来た彼が、当社の背後にある生駒山を越えて大和国へ向かい、③の吉野は、途中で立ち寄った地。④は、大和での戦いに際して陣を張った地で、スギは戦いの勝利を祈念して植えた^⑧と伝わっている。

さらに遡り、スサノオノミコトが植えた^⑨と伝わるスギ（八坂神社、高知県大豊町）がある。樹齡三千年とされ、神社境内のスギの中では日本一である。当社の祭神はスサノオノミコト。彼はイザナギノミコトとイザナミノミコトの子である。

上記から、伝説上初めてお手植えをしたのはスサノオノミコト、次いで神武天皇と判明した^⑩。

来日僧たちのお手植え伝説

日本の高僧のお手植えを考察する上で、来日僧の伝説も見過^⑪ごせない。

鎌倉市に蘭溪道隆（一二二—一三七八）お手植えの①イチヨウ（常楽寺）と②ビヤクシン（建長寺）がある。彼は寛元四（一二四六）年に南宋から来日。北条時頼に鎌倉へ招かれ、①の常楽寺の住持を務め、②の建長寺を開山した。ビヤクシンは、彼が宋から持参した種を植えたものと伝わる。円覚寺には、無学祖元（一二二六—一八六）が植えたと伝わるビヤクシンがある。彼は、弘安二（一二七九）年に北条時宗の招きで南宋から来日し、円覚寺を開山した。

また宇治市の萬福寺に、隠元隆琦（一五九二—一六七三）が植えたと伝わるチャンチンがある。彼は承応三（一六五四）年に中国福建省から来日。萬福寺を開山し黄檗宗の祖となった。チャンチンは、彼が中国から持参して植えたと伝わる。

この三者は禅僧で、木を開山の禅寺に植えた。イチヨウとチャンチンは中国原産の木。蘭溪道隆はビヤクシン、隠元隆琦はチャンチンを中国から持参して植えたと伝わる。ビヤクシンは、禅の教え（泰然自若〓落ち着いて物事に動じない）がビヤクシンのゆつくりとした成長に通じるため、宋風の前庭様式を踏襲して禅寺の前栽に植えられる。このようにお手植え伝説から、鎌倉時代以降に来日僧が、我が

国の寺院に樹木の苗や種をもたらしたことが知られる。^⑦

二、各時代の高僧とお手植え樹木

ここでは、お手植え伝説を持つ高僧と樹木を紹介する。時代を、飛鳥・奈良時代、平安時代、平安末期から鎌倉初期、鎌倉時代、鎌倉末期から室町初期、室町時代、安土桃山・江戸時代に分け、高僧名・生没年・出身地・宗派、北から都府県順に樹木名（カタカナで表記）とその木が生育している場所・住所（都府県、市町村名）を記し、各々の高僧と樹木、その場所の関係を解説文にまとめる。

〈飛鳥・奈良時代〉

行基（六六八—七四九）大阪府、法相宗

- ①イチヨウ（千葉寺、千葉市）（光圓寺、東京都小石川）（飛騨国分寺、岐阜県高山市）、②スギ（大光寺、静岡県泉野町）、③イヌマキ（法蔵寺、愛知県岡崎市）、④マツ（八坂寺〓鯖大師本坊、徳島県海陽町）、⑤ソテツ（誓願寺、香川県小豆島町）、⑥ボダイジュ（盛景寺、愛媛県伊予市）、⑦ナギ（舍利蔵自然林〓勝宝寺跡、福

岡県富津市)、⑧クスノキ(諫早神社、長崎県諫早市)

行基のお手植え樹木が一〇か所に八種あることは、彼が聖武天皇から東大寺大仏造立の協力を依頼され、勧進のため全国を行脚したとと関係があるだろう。行基開基の伝承を持つ寺が全国に約六百寺あるというが、右記の寺はいずれも行基が開いたと伝わる寺である。

①の千葉寺は和同二(七〇九)年、飛騨国分寺は天平一八(七四六)年、②の大光寺は養老二(七一八)年の創建である。③の法蔵寺は現在、浄土宗の寺だが、行基が法相宗の出生寺として創建し、平安時代に空海の来訪により真言宗となり、南北朝時代に浄土宗に改宗された経緯を持つ。イヌマキは、行基が寺創建時に植えたと伝わる。

④は、当地を訪れた空海がこのマツの下で野宿し、行基の夢を見たと伝わる。⑤のソテツは雌株。⑥のボダイジュは、天平一三年の四国巡錫中、当地の人々を教化した際に植えたと伝わる。⑦の舍利蔵自然林とは、舍利蔵に広がっている森のこと。養老二年に行基が勝宝寺を創建して仏舍利を納め、ナギを植えたと伝わる。現在ナギは五本ある。⑧のクスノキ六本は「諫早神社のクス群」とされ、うち一本は御神木。

泰澄(六八二―七六七) 福井県、修験道

①トチノキ(越知神社、福井県越前市)、②スギ(平泉寺白山神社、福井県平泉寺町)(横根寺、福井県横根町)

泰澄は一四歳で出家。故郷の越知山に籠って修行し、養老元(七一一)年に白山を開いた。上記の寺社の創建は泰澄。①②の神社のトチノキとスギは御神木。②の白山神社の三つ又になったスギの幹は、白山三社を表しているとされる。横根寺のスギは、寺建立時に植えたと伝わる。二本の杉が鳥居のような姿になり山門の役割を果たしている。

良弁(六八九―七七四) 神奈川県または滋賀県、華嚴宗

スギ(金勝寺、滋賀県栗東市)

良弁は、奈良大仏で知られる東大寺を開山した。幼い時、大鷲に攫われ東大寺二月堂の杉の樹上に運ばれていたのを義淵に助けられ養育されたことは、能や歌舞伎で知られる(この杉は「良弁杉」と呼ばれ二月堂前にある)。お手植えのスギがある金勝寺は、良弁が天平五(七三三)年に開基した寺である。

〈平安時代〉

最澄（七六六—八二二） 滋賀県、天台宗の開祖

- ① マキ（櫟野寺、滋賀県甲賀町）、② スギ（高尾寺跡、滋賀県長浜市）、③ サラノキ（延暦寺浄土院、滋賀県大津市）

最澄は、延暦二三（八〇四）年に入唐し、帰国後、比叡山に天台宗を開いた。①の櫟野寺は、彼が延暦寺根本中堂の用材を求めて当地を訪れ、櫟の生木に十一面観音を彫り安置したのを始まりとする。マキはこの時植えたと伝わる。②の高尾寺は行基が建立し、最澄が再興した。スギは、最澄が再興時に作った玉串（杉枝を折り地面に挿して念じた）が成長したものと伝わる。③の浄土院は最澄の廟所。サラノキは、最澄が唐から持ち帰ったものと伝わる。また延暦寺には、天台山香炉峰から持ち帰ったとされるテイノキ（トウヒ）があつたが、現在は見られない。

最仙（生没年未詳） 茨城県、天台宗

イチヨウ（西蓮寺、茨城県行方市）

最仙は最澄の高弟。西蓮寺は、最仙が延暦元（七八二）年に開創した。イチヨウ二株は、乳を多く付けた雄株であ

木を植えた高僧たちの伝説

る。また最仙には、入唐して茶の種を持ち帰り、故郷で栽培を始めた伝説もある。

空海・弘法大師（七七四—八三五） 香川県、真言宗開祖

- ① コウヤマキ（日光二荒山神社、栃木県日光市）（玉桂寺、滋賀県甲賀市）、② カヤ（徳星寺、埼玉県上尾市）（大興寺、香川県三豊市）、③ フジ（蓮華院跡、埼玉県春日部市）（藤井寺、徳島県吉野川町）、④ スギ（瑞光寺、富山県南砺市）（祇園寺、岡山県高梁市）（浄蓮庵、徳島県神山町）（極楽寺、徳島県鳴門市）、⑤ ビヤクシン（小坂公園Ⅱ小坂観音院、長野県岡谷市）・イブキビヤクシン（浄瑠璃寺、愛媛県松山市）、⑥ ボダイジュ（法華寺三田洞弘法、岐阜県岐阜市）、⑦ クスノキ（田光八幡社、愛知県名古屋市）（熱田神宮、同上）（大興寺、香川県三豊市）、⑧ マツ（大喜寺、愛知県名古屋市）（安楽寺、徳島県上板町）（曼荼羅寺、香川県善通寺市）（延命寺、愛媛県四国中央市）（泰山寺、愛媛県今治市）、⑨ カエデ（延命寺、大阪府河内長野市）、⑩ ヤナギ（大澤寺、奈良県五條市）、⑪ イチヨウ（来迎院、奈良県天川村）（高野寺、鳥根県出雲市）（地藏寺、徳島県板野

町)

空海は、諸国を行脚して多くの伝説を残しており、お手植え伝説の数も高僧の中で最も多い。上記のうち空海創建の寺は、①玉桂寺、②徳星寺、③藤井寺、④瑞光寺と祇園寺、⑥法華寺、⑧大喜寺と安樂寺、⑨延命寺、⑪高野寺と地藏寺。再興の寺は、②⑦の大興寺である。⑩大澤寺の開基は役行者、④極樂寺、⑤淨瑠璃寺、⑧曼荼羅寺と延命寺の開基は行基だが、再興はいずれも空海と伝わる。

①の日光二荒山神社のコウヤマキは、空海が弘仁二一（八二〇）年に二荒山に滝尾権現と寂光権現を祀り、二荒山を改め日光山と命名した際に植えたと伝わる。玉桂寺のコウヤマキは、二〇年間の唐留学を二年で切り上げて帰国したため、朝廷から三年間入京を許されず諸国を巡錫中に、寺の石段両脇に一株ずつ植えたとされる。それは唐から持ち帰った苗で、聖武天皇と皇族の供養のためであったと伝わる。②の大興寺のカヤは、種を植えたと伝わる。③の藤井寺は、自身の厄払いと衆生の安寧を願って創建。フジはこの時植えたと伝わる。

④の祇園寺のスギは「天狗大杉」と呼ばれ、樹皮を噛めば歯痛が止むと言われている。淨蓮庵は、空海が修行のた

め焼山寺に向かう途中、仮眠の夢に阿弥陀如来が出現。尊像を刻み安置したのが始まり。スギはこの時植えたと伝わる。極樂寺のスギは、空海が当寺で二一日間の修法を終え、寺の末永い守護を祈願して植えたと伝わる。「長命杉」と呼ばれ、木肌に触れると長命を保ち天寿を全うできるといふ。

⑤のビャクシンは、当院を訪れ衆生済度の護摩供養をした際に植えたと伝わり、⑥のボダイジュは、弘仁七年に植えたと伝わる。⑦の田光八幡社は、熱田神宮の遥拝所。「弘法七本楠の由来」があり、巡錫の空海がクスノキを当社に一本、古井の坂に一本、熱田神宮に五本植えたと伝わる。熱田神宮のクスノキは御神木になっている。

⑧の大喜寺のマツは枯れ、今は「弘法大師御手植松」の記念碑が遺る。安樂寺のマツは、空海が自身の身代わりになったマツをさかさまに植えたもので「逆松」と呼ばれている。彼は、このマツが芽を出し栄えるなら、後にこの地を訪れる者は災厄を逃れるだろうと言ひ植えたと伝わる。曼荼羅寺は、もと世坂寺。行基が佐伯氏（空海の先祖）の氏寺として開基し、空海が再興して母の菩提寺とした。マツはこの時植えたとき、**「不老松」**と呼ばれていたが、枯れたため幹に弘法大師座像を刻み安置している。延命寺の

マツは、枝を大きく広げた樹相で「いざり松」と呼ばれ、高野山の「三鈷の松」と同じ三本葉である。泰山寺のマツは「不忘の松」という。弘仁六年、川が氾濫する当地を訪れ、治水の土砂加持を行ない植えたと伝わる。

⑪の来迎院は、天河大辨財天社の塔頭の一つであった。空海は当社に詣で修行したと伝わる。イチヨウは雌株。

円仁＝慈覚大師（七九四―八六四） 栃木県、第三代天台座主

① **カヤ**（湊浜薬師堂、宮城県七ヶ浜町）（真山神社＝光飯寺の跡、秋田県男鹿市）、② **イチヨウ**（立石寺＝山寺、山形県山形市）、③ **マツ**（安久津八幡神社、山形県高畠町）、④ **シイ**（瑠璃光寺、埼玉県深谷市）、⑤ **タラヨウ**（慈光寺、埼玉県ときがわ町）、⑥ **スギ**（鰐淵寺、島根県出雲市）

円仁は、九歳から大慈寺（栃木市）で修行。一五歳で比叡山延暦寺に登り二一歳で出家。最澄に師事して関東・東北地方へ布教の旅をした。四五歳で唐に留学。帰国後、立石寺（山形県）や瑞巖寺（宮城県）を開いた。

右記の①光飯寺、②立石寺、④瑠璃光寺、⑤慈光寺の創

木を植えた高僧たちの伝説

建は円仁。①の湊浜薬師堂に、円仁が海上安全を祈願して一夜で彫ったという薬師如来像がある。②のイチヨウは御神木。③のマツは、貞観二（八六〇）年に植えたと伝わる。④の寺は、円仁が大同二（八〇七）年または承和二（八三五）年に創建したと伝わる。⑤のタラヨウは、天長年間（八二四―一三四）に植えたと伝わる。タラヨウの葉は「葉書」の語源であり、葉の表面を棒などで傷つけると黒色に変色して文字が書ける。⑥のスギ三本は「三台杉」と呼ばれている。寺は円仁により日本最初の延暦寺末寺となった。

宗叡（八〇九―八八四） 京都府、真言宗

ボダイジュ（永観堂＝禅林寺、京都市）

四歳の時、比叡山で出家。禅林寺の真紹から灌頂を受けた。禅林寺は真言宗の道場であった。宗叡は入唐八家の一。ボダイジュは、貞観一八（八七六）年に唐から持ち帰ったものを植えたと伝わる。

空也（九〇三―七二） 生誕地不明、浄土教

マツ（浄土寺、愛媛県松山市）

浄土寺の創建は明恵だが、空海が再興して真言宗に改宗。

空也が天徳年間（九五七—六〇）に教化のため当地に滞在し、自刻の木像を残したとされる（空也上人立像。国の重要文化財）。マツは「空也松」と呼ばれているが、今は根株のみ残る。

〈平安末期から鎌倉初期〉

西行（一一八一—九〇）和歌山県または京都府

①ハギ（高台寺、京都市）、②サクラ（勝持寺、同上）
（西光寺、同上）（三昧堂、和歌山県高野山）

西行は武士で歌人でもある。鳥羽院に北面の武士として仕えたが、二三歳で出家。三〇歳頃から各地を旅し、二千首余りの和歌を遺した。

①のハギは、慈円に献じた宮城野のハギが残っていたのを、当寺に植えたものと伝わる。②の勝持寺は、西行（佐藤義清）が出家した寺。この寺と西光寺にも庵を結んだ。高野山には、三二歳頃から約三〇年間庵を結んだと伝わる。空海が高野山を開山した際、真つ先に造営したのが壇上伽藍。西行はその三昧堂で修行したとされる。生涯でサクラの和歌を二三〇首遺し、「願わくは花の下にて春死なんその如月の望月の頃」と詠んで旧暦二月一六日（釈迦涅槃の日）

に入寂した。

法然（一一三三—一二二二）岡山県、浄土宗の開祖

①イブキ（西伝寺、浜松市西伝寺町）、②ダボイジュ（浄願寺、滋賀県信楽町）、③マツ（阿弥陀寺、神戸市脇浜町）（西念寺、香川県まんのう町）

法然は九歳で父を亡くし、延暦寺に登り一五歳で出家した。彼は、全国各地に弟子をとどめ草庵を開かせた。①の西伝寺は、弟子の西伝が結んだ草庵が寺となった。イブキは、宝暦九（一七五九）年の火災で奇跡的に焼け残り、再び芽吹いて今に至る。②の浄願寺は元和元（一六二二）年、法然の草庵に多羅尾光太が堂宇を建立したことに始まる。

法然は七五歳の時、承元の法難にあい讃岐国に配流された。③の阿弥陀寺がある脇浜は、配流時にこの浜から出航し、赦免時に上陸した地である。豪族・富松右衛門邸に滞在し、右衛門は法然の弟子になり邸を阿弥陀寺にしたという。この時法然は、仏教が末永く栄えるようマツを植えたと伝わる。また西念寺は、法然が滞在したと伝わる生福寺跡に再建された寺。マツは「六華の松」と呼ばれている。寺には、法然の分骨を納めた御廟、水面に映った自身の姿

を描いた自筆と伝わる「宝瓶ほうびょうの御影みえい」がある。

栄西（一一四一—一二二五）岡山県、臨済宗の開祖

①ボダイジュ（延暦寺、大津市）（建仁寺、京都市）（安養寺、岡山市）（報恩寺、福岡市）、②イチヨウ（安養寺、岡山市）

一四歳の時、比叡山延暦寺で出家。宋に二度留学した。

①②の安養寺は、栄西が得度した寺と伝わる。建久三（一一九二）年に①の報恩寺、建仁二（一二〇二）年に京都に初めての禅寺・建仁寺を開山した。延暦寺、建仁寺、報恩寺のボダイジュは、彼が中国から持ち帰り植えたものと伝わる。報恩寺のそれは、開山時に植えた「日本最初のボダイジュ」と伝わる。

俊寛（一一四三—七九）生誕地不明、真言宗

スギ（別所瀧之社、富山県小矢部市宮島）

安元三（一一七七）年、鹿ヶ谷山荘での平家打倒の密談が露見し、藤原成経、平康頼と共に喜界ヶ島へ配流された。成経と康頼は赦免され都に戻ったが、俊寛は許されず島にとり残された。この話は『源平盛衰記』や『平家物語』で

語られ、能や歌舞伎の「俊寛」で演じられる。

ところが、俊寛の流刑地は喜界ヶ島ではなく、富山県宮島であったと伝わる。スギは、俊寛が赦免を願って植えたものと伝わる。

弁長Ⅱ聖光上人（一一六二—一二三八）福岡県、浄土宗二祖

クスノキ（善導寺、久留米市）

弁長は九歳で出家し、一二歳で比叡山に登り天台教学を学んだ。三六歳の時、法然に出会い帰依した。九州を中心に活躍し、鎮西上人とも称される。善導寺は、彼が建長二（一一九二）年に開山。クスノキはその時植えたと伝わる。

〈鎌倉時代〉

明恵（一一七三—一二三三）和歌山県、華嚴宗中興の祖

ナギ（施無畏寺、和歌山県湯浅町）

明恵は八歳で両親を亡くし、神護寺で真言や華嚴の教えを学び出家した。三四歳の時、高山寺を創建。高山寺の後山・楞伽山りやうがせんの縄床樹（二股に分かれた松の上）で常に坐禅したことが知られる。⁽¹⁰⁾ ナギを植えたという当寺の開基は明

恵。寺がある湯浅町は、母ゆかりの地。周辺は明恵の若い頃の修行地である。

親鸞（一一七三—一二六三）京都府、浄土宗の宗祖

①クスノキ（青蓮院、京都市）、②ウメ（岡崎別院＝岡崎草庵跡、同上）（宝満寺、滋賀県愛荘町）、③サクラ（月輪寺、京都市）、④イチヨウ（願船寺、茨城県東海村）（小島の草庵跡、茨城県下妻市）、⑤ボダイジュ（光明寺、同上）（長命寺、千葉県野田市）（真楽寺、神奈川県小田原市）（教津坊、愛知県津島市）

①の青蓮院は、最澄開山の天台宗寺院。親鸞は九歳の時、当寺で慈円を戒師に出家した。この後、比叡山で厳しい修行と学問を積み、二九歳の時、六角堂で夢告を得て法然の弟子となった。②の岡崎別院は、彼が比叡山を下りて結んだ草庵跡とされ、ここから吉水（東山区円山町）の法然のもとへ通ったとされる。

しかし、承元の法難により法然は高知県、親鸞は新潟県に配流された。③のサクラは「時雨桜」と呼ばれ、配流時に親鸞が法然との別れを惜しんで植えたと伝わる。今も四、五月に葉から雪を落とし、まるで悲しみの涙を流すかのよ

うだと言われている。

赦免後、四二歳の親鸞は妻子を伴い関東（茨城県）に入った。④の願船寺の創建は高弟の定信。イチヨウは雌株。小島の草庵では三年間逗留して布教活動を行ない、稲田へ移った。イチヨウは「稲田恋しの銀杏」と呼ばれ、親鸞を慕い北向き（稲田の方角）に枝を伸ばすと伝わる。

⑤の光明寺は、弟子の明空が創建。親鸞が初めて布教した寺とされる。明空は、承久二（一二二〇）年、小島に逗留した親鸞に出会い弟子となった。寺には明空手植えのヒイラギもある。長命寺の創建は高弟の西念。彼は親鸞が越後から関東へ移る際に随行した。親鸞は建保元（一二二三）年、ボダイジュの実で作った数珠の一玉を柳の葉で包み、桑の葉を覆って地中に埋め、この地の念仏繁盛を願ったと伝わる。真楽寺は、聖徳太子開基の天台宗の寺であったが、親鸞が居住した縁で浄土真宗に改宗。親鸞帰洛までの七年間、相模国の布教拠点となった。教津坊も、親鸞が嘉禎元（一二三五）年に逗留し、浄土真宗に改宗された。ボダイジュはこの時植えたと伝わる。

帰洛は六〇歳の時で、親鸞は②の宝満寺（開基は知徳・真言宗）に立ち寄った。愛知川が氾濫して渡れず、当寺を

仮宿にしたのである。ウメ（紅梅）はこの時に植え、寺は浄土真宗に改宗されたと伝わる。帰洛して最初に入ったのは②の岡崎草庵と伝わる。

法身性西Ⅱ真壁平四郎（一一八九—一二七三）茨城県、臨済宗

イチヨウ（青森県七戸町）

法身禪師は「血染めの下駄」事件後、四五歳の時、高野山で出家。宋に渡り、帰国後の七〇歳を過ぎて北条時頼に認められ、宮城県に円福寺（後に松島の瑞巖寺となる）を開山した。栄耀を嫌い、八〇歳前に七戸町に庵を結び暮らし、イチヨウは、この時植えたと伝わる。多数の気根が下垂し「子守イチヨウ」と呼ばれている。

叡尊（一二〇一—一九〇）奈良県、真言律宗の開祖

ボダイジュ（西大寺、奈良市）

叡尊は、文暦二（一二三五）年に西大寺（奈良時代に創建。平安時代に衰退していた）に入り、当寺を復興した。

円爾Ⅱ聖一国師（一二〇二—一八〇）静岡県、臨済宗

木を植えた高僧たちの伝説

①**イブキ**（東福寺、京都市）、②**モミジ**（同上）

円爾は三三歳で宋に渡り、六年後に帰朝。①②の東福寺は、寛元元（一二四三）年、九条道家が九条家の菩提寺とするため、帰朝していた円爾を迎えて開山した。イブキとモミジは、円爾が宋から持ち帰ったものとされる。イブキは『都名所図会』（二七八〇年）にも「開山国師宋国より携へ来る」と記述がある。モミジは、唐楓^{とうかえ}という黄金色に染まる三ツ葉楓である。

実弘（生没年・生誕地不詳）真言宗

イブキ（成相寺、兵庫県南あわじ市）

実弘上人は、鎌倉時代初めの高野山悉地院の僧。成相寺は、仁治四（一二四三）年、高野山伝法院の争乱で淡路島に配流された彼が、高野山を模して建立した寺と伝わる。

清秀（生没年・生誕地・宗派不詳）

サクラ（愛宕神社Ⅱもと地藏寺、長野県飯田市）

当社は、飯坂城跡に建立された地藏寺の境内にあたる。サクラは、地藏寺の僧であつた清秀法印が仁治元（一二四〇）年に植えたと伝わる。エドヒガンザクラで「清秀桜」

と呼ばれている。

日蓮（一二二一—八二）千葉県、日蓮宗の宗祖

- ①ウメ（妙蓮寺、千葉県鴨川市）、②サクラ（同上）、
③スギ（久遠寺、山梨県身延町）、④イチヨウ（本國寺、
身延町）、⑤マツ（妙善寺、同上）（大慶寺、静岡県藤
枝市）

一二歳で清澄寺に入り、一六歳で出家。鎌倉、比叡山、
高野山などへ遊学。三二歳の時、南無妙法蓮華經の題目を
唱える立教開宗を行ない、三九歳の時『立正安国論』を著
した。しかし、讒言にあつて伊豆、佐渡に流罪。五二歳で
身延山に入り、説法と執筆活動を行なった。

①②の妙蓮寺に、父母の墓所がある。ウメは、正嘉一（一
二五八）年に死去した父の冥福を祈つて植え、サクラは、
母の蘇生を記念して植えたと伝わる。母は文永元（一二六
四）年に亡くなった直後、日蓮の祈願により蘇生し寿命が
四年延びたという。③の久遠寺は、彼が文永一一年に開創
した。四本のスギは、父母の追善、師への報恩、そして立
正安国を祈念して植えたと伝わる。

④のイチヨウはオハツキイチヨウ。弘安五（一二二八）

年、当寺宿泊時に植えたと伝わる。⑤の妙善寺のマツは、
布教の途次に立ち寄り植えたとされ、その日は節分（年越
の日）であり「年越の松」と呼ばれている。大慶寺のマツ
は、建長五（一二五三）年、比叡山遊学の途次に当地を訪
れ、茶店を営む道円・妙円夫婦を説法教化し、未来永久に
仏の道が栄えることを祈念して植えたと伝わる。夫婦は自
宅裏に法華堂を建立し大慶寺の基を開いた。マツはクロマ
ツ。「久遠の松」と呼ばれている。

明空（一二二五—九七か）生誕地不詳、浄土真宗

ヒイラギ（光明寺、茨城県下妻市）

彼の俗名は三浦荒次郎義忠。宝治元（一二四七）年、三
浦氏滅亡時に出家し親鸞の弟子となった。当寺の開基は明
空。ヒイラギを好み境内に多く植えたので、寺は「柵道場」
とも呼ばれている。ヒイラギの和歌「われもまた心に造る
罪科を名にあらわして植うる一本」を遺した。

如信（一二三五—一三〇〇）京都府、浄土真宗本願寺第
二代

カヤ（法龍寺、茨城県大子町）

如信は親鸞の孫。カヤは、正応二（一二八九）年に門弟の乗善房が当地に草庵を結んだ際、如信が植えたと伝わる。法龍寺は、如信の布教の拠点。終焉の地でもある。

日朗（一二四五—一三二〇）千葉県、日蓮宗

トチノキ（七面山安住坊、山梨県早川町）

日朗は、日蓮の高弟で六老僧の一人。日蓮流罪の際、土牢に押込となったが、抜け出して佐渡島に日蓮を訪ね、また赦免状を携えて渡ったとされる。七面山は身延山とともに法華経信仰の聖地。その開創は日朗とされ、安住坊は、彼が七面大明神を祀るために休息した地と伝わる。トチノキはその庭にある。

日興（一二四六—一三三三）山梨県、日蓮宗

スギ（本門寺、静岡県富士宮市）

日興は、日蓮の高弟で六老僧の一人。当寺の開創は日興。その時スギを、南無妙法蓮華経の七文字にあやかり七本植えたと伝わる。うち三本が遺り「お題目杉」と呼ばれている。

日印（一二六四—一三二九）新潟県、日蓮宗

ウメ（青龍寺、新潟市）

日印は、日朗の弟子で日蓮の孫弟子。鎌倉幕府による他宗との論争を高齢の日朗に代わって行ない、論破して鎌倉での布教を許された。当寺は、日印が八歳の時に入り仏教を学んだ寺。ウメは三代目とされる。

〈鎌倉末期から室町初期〉

覚如（一二七〇—一三五一）京都府、浄土真宗本願寺第三代

イチヨウ（法龍寺、茨城県大子町）

当寺の創建は如信（浄土真宗本願寺第二代）。また如信終焉の寺である。イチヨウは、覚如が如信の一三回忌である正和元（一二二二）年に植えたと伝わる。

弧峰覚明 〓 三光国師（一二七一—一三六一）福島県、臨

済宗

サクラ（建福寺、島根県隠岐の島町）

弧峰覚明は比叡山で学び、応長元（一一三二）年、元に渡った。隠岐に配流された後醍醐天皇に招かれて戒を授け

国済国師の号を与えられた。サクラは、彼が一三四七年に当寺を開山した時に植えたと伝わる、二本のエドヒガンザクラである。花の咲き方でその年の豊作・凶作を占い、江戸時代から「世間桜」の名で知られていた。
よのなかざくら

夢窓疎石（一二七五—一三五二）三重県、臨済宗

①ビヤクシン（古長禅寺、山梨県南アルプス市）、②サクラ（宝寿院、山梨県市川三郷町）、③キンモクセイ（永明寺、群馬県邑楽町）、④ウメ（東香寺、岐阜県富加町）

幼少時に山梨県に移住。出家して真言宗や天台宗、禅宗を学んだ。後醍醐天皇、足利尊氏から信任され、門弟は一万人以上とされる。自らを「石立僧」と称した作庭家で、西芳寺や天龍寺など禅宗庭園の基礎を築いた。

①のビヤクシンは、彼が寺創建の正和五（一一三六）年に、四天王をかたどり庭の四隅に四本植えたと伝わる。②の宝寿院は、四歳で母を亡くして出家したとされる寺。奈良で修業を積み三十一歳の時当寺へ戻り、母の菩提を弔うため築庭してサクラを植えたと伝わる。サクラは現在六代目。③のキンモクセイは、彼が元弘元（一一三二）年に寺を開

基した際に植えたとされる。④の寺は、彼が正和四（一一三五）年に開山。作庭も手掛けたと伝わる。ウメは紅梅。

元翁本元Ⅱ仏徳禅師（一二八二—一三三二）兵庫県、臨

済宗

イチヨウ（永保寺、岐阜県多治見市）

当寺は、正和二（一一三二）年に夢窓疎石が開山した。彼は元翁本元と親交があり、上京に際して当寺の後事を元翁本元に託した。元翁本元の没後、建武二（一一三五）年に、開山が夢窓疎石から元翁本元に改められ、開山堂は元翁本元を祀る。イチヨウは雄株。

寂室元光Ⅱ正燈国師（一二九〇—一三六七）岡山県、臨

済宗

①カエデ（永源寺、滋賀県東近江市）、②ウメ（同上）

寂室元光は一三歳で出家。東福寺で修行した。三十一歳から七年間、元に渡航し、帰国後は諸国を行脚。①②の永源寺は、七一歳の時、近江守護職の佐々木氏頼に請われて開山した。カエデの木は三代目。ウメは紅白一對。

日叡（生没年・生誕地不詳） 日蓮宗

ソテツ（妙法寺、鎌倉市）

当寺は、建長五（一二五三）年に日蓮が草庵を結び二〇数年間過ごした松葉ヶ谷の地にある。日叡は護良親王（一二三八―一三五）の子とされる。彼は延文二（一二五七）年、日蓮を偲び、また悲壮な最期を遂げた父の菩提を弔うため寺を再興した。

本禅等釈（生没年・生誕地不詳） 臨済宗

サクラ（護真寺、福島県須賀川市）

サクラは、シダレエドヒガンザクラ。観応二（一二五一）年、本禅等釈禅師が当寺を開山した際に植えたと伝わる。「種まさ桜」と呼ばれ、農家は花が咲くと播種作業に入った。

〈室町時代〉

大徹宗令（一二三三―一四〇八） 熊本県、曹洞宗

①イチヨウ（向川寺、山形県大石田町）、②カツラ（同上）

大徹宗令は、北陸・東北地方に禅宗を広めた。①②の向川寺は、彼が永和三（一二七七）年に開山した。山寺（立

石寺）と肩を並べるほど隆盛を誇った寺である。

良如（一二四四―一四二二） 福井県、浄土宗

スダジイ（西福寺、敦賀市）

当寺は、良如が応安元（一二六八）年に開山。スダジイ（椎の木。実は食用）は、御影堂の左右に雌雄二株ある。良如が、万一の飢饉に備えて住民が飢えをしのぐことができるよう植えたと伝わる。

綽如（一二五〇―一九三） 京都府、浄土真宗本願寺第五代

①スギ（梅谷神社、富山県砺波市）、②マツ（普願寺、富山県南砺市）

綽如は、本願寺第五代宗主になったが、第二子の巧如に後事を託して北陸に赴き草庵を結んだ。明徳元（一二三〇）年、南砺市井波に瑞泉寺を開き、この地方に布教した。①②のスギとマツは、この時植えたと伝わる。マツは、宗門が栄えるよう祈願して植えたと伝わるが、枯れたため今は「栖息の松跡」として株が保存されている。南砺市井波町は綽如の没地である。

一休宗純（一三九四—一四八二）京都府、臨濟宗

①マツ（大徳寺、京都市）、②スギ（酬恩庵一休寺、京都府京田辺市）、③ギンモクセイ（少林寺、滋賀県守山市）

六歳の時、安国寺で受戒。二二歳の時、①の大徳寺の華叟宗曇の弟子となった。八一歳の時、当寺の住持を任され、応仁の乱で荒廃した寺の再建をはかった。マツは、一休が盆栽のマツを植えたものと伝わり、本堂前にある。

②の寺は、もとは正応年間（一二八八—九三）に南浦紹明が開いた妙勝寺。康正二（一四五六）年に一休が草庵（酬恩庵）を結んで中興し、八八歳で没するまで過ごした。当寺に遺骨が葬られているという。スギは、一休が植えたとする他、彼と親交があった蜷川新右衛門と蓮如の三人が一本ずつ植えたとも伝わる。木は二代目（昭和四〇年植樹）。③の少林寺は、一休の高弟・桐嶽紹鳳（一四五二—一五三四）が開創。一休が一時逗留したとされ、一休に関する文化財が多く残されている。

宥日（一三九六—一四七三）山形県、真言宗

イチヨウ（遍照寺、山形県長井市）

宥日は高野山で修行した。火伏せ祈祷の名人とされ鎮火の伝説を持つ。

当寺がある長井市は、宥日の生誕地。寺は行基の開基だが、永享の頃（一四二九—四一）、宥日が中興開山した。この木の銀杏を食べると一冬健康に過ごせ、葉がすべて散ると根雪になると伝わる。

蓮如（一四一五—九九）京都府、浄土真宗本願寺第八代

①イチヨウ（報恩寺、茨城県常総市）（専通寺、石川県かほく市）（笠池ヶ原、石川県津幡町）、②ヒバ実際はサワラ（本泉寺、石川県金沢市）、③マツ（石川県白山市美川和波町）（吉崎御坊跡、福井県あわら市）（福田寺、滋賀県米原市）、④ボダイジュ（西園寺、岐阜県大垣市）（善養寺、三重県川越町）、⑤クスノキ（専光寺、愛知県刈谷市）、⑥ウメ（西光寺、三重県名張市）、⑦スギ（奈良県下市町才谷峠）

蓮如は一七歳の時、青蓮院で得度。三五歳と五四歳の時、東国布教を行なった。①の報恩寺は、建保二（一二二四）年に親鸞の第一弟子・性信が開山。イチヨウは蓮如が植えたと伝わる。

文明三（一四七二）年に吉崎御坊、一五年に山科本願寺、明応六（一四九七）年に石山本願寺を建立。専通寺のイチヨウは、北陸布教時に植えたと言われる。昭和三年の大火事に延焼をくい止め「火伏せのイチヨウ」と呼ばれる。

②の本泉寺は、嘉吉二（一四四二）年に叔父・如乗が創建。蓮如は文明年間に滞在し、作庭したと伝わる。枝が西方（浄土の方向）に伸びるので「西向きのヒバ」と呼ばれている。③の白山市にあるマツは、この地で休息した折に植えたと言われる。「蓮如上人御旧跡の松」の石碑を建て地元の人々が大切にしている。現在は二代目。蓮如が吉崎御坊を造営した時に植えたと言われるマツは「お花松」と呼ばれている。枯れたが株を屋根で覆って大切にし、代替のマツを植えている。福田寺のマツは、当寺に滞在した延徳年間に植えたと言われる。

④の西圓寺の開基は最澄。永仁三（一二九五）年に住職の如信（天台僧）が覚如（本願寺第三代）に帰依。嘉暦二（一二三二）年に真海が浄土真宗寺院に改めた。ボダイジュは、文明二年に蓮如が逗留して教化を行なった際に植えたと言われる。善養寺のボダイジュは、寛正年間（一四六〇—一四六六）に布教のため当寺を訪れた際、庭に種を蒔いて寺の

繁栄と樹木の成長を念じたと伝わる。

⑤の専光寺は、もと天台宗寺院。蓮如が当地を訪れ、住持の慶念坊が弟子になり浄土真宗に改宗。クスノキはこの時植えたと言われる。⑥のウメは、応仁二（一四六八）年、巡錫時に立ち寄り植えたと言われる。⑦のスギは、文明七年にこの地を訪れた際、才谷峠で休息し後世の思い出に植えたと言われる。吉野町に蓮如創建の本善寺がある。

祐全（生没年・生誕地不詳）浄土宗

イチヨウ（西方寺、奈良市油阪町）

祐全は東大寺の僧。西方寺第一世住職。西方寺は、行基が神亀年間（七二四—二九）に多聞山に創建。永禄二（一五五九）年に祐全が現在の地に移築再興した。イチヨウはその時、火難・水難など一切の厄難からこの寺を護れと願い植えたと言われる。寛永一五（一六三八）年、南都奉行・中坊飛騨守の孫がこの木のギンナンに命を救われた話が残る。

〈安土桃山・江戸時代〉

天海Ⅱ慈眼大師（一五三六？—一六四三）福島県、天台

宗

①ヒノキ（伊佐須美神社、福島県会津美里町）、②マキ（喜多院、埼玉県川越市）、③マツ（東雲寺、滋賀県長浜市）

天海は幼い時に出家し、各地を遍歴して修行を重ねた。武田信玄、徳川家康らに仕え、織田信長に焼き討ちされた比叡山の復興再建や日光東照宮の造営に尽力した。

①の神社がある会津美里町は、天海の生誕地。ヒノキは、永祿元（一五五八）年に母の看病で帰郷した際に植えたといわれる。②の喜多院は、天海が慶長四（一五九九）年に第二七世住職として入り隆盛を誇った。マキは御神木になっている。③の東雲寺の開基は最澄。空源（涅槃宗の開祖）が荒廃を嘆き中興。天海が慶長六（一六二〇）年に新たに創立し、空源を偲びマツを植えたといわれる。

沢庵宗彭（一五七三—一六四六）兵庫県、臨済宗

ワビスケツバキ（宗鏡寺、兵庫県豊岡市）

当寺は、元中九（一三九二）年に山名氏清が山名氏の菩提寺として開基した。沢庵は山名氏滅亡後、荒廃していた当寺を元和二（一六一六）年に再興。豊岡市は沢庵の故郷。

寺は沢庵寺とも呼ばれている。

潮音道海（一六二八—一九五）佐賀県、黄檗宗
ギンモクセイ（臨川寺、岐阜県関市）

潮音道海は、隠元隆琦の弟子。全国に二〇数ヶ寺を開山し、弟子が六三人いたとされる。当寺は、元和三（一六一七）年に臨済宗の寺として開かれたが、万治三（一六六〇）年に潮音道海が黄檗宗に改めた。ギンモクセイは、本堂前に一對ある。

雲山（生没年・生誕地不詳）曹洞宗

イチヨウ（永泉寺、岐阜県多治見市）

当寺は、行基の開基と伝わる華嚴宗の寺であったが、寛文年間（一六六一—一七三）に雲山大和尚が中興し曹洞宗に改めた。イチヨウは雌株。

臺翁寒易（生没年・生誕地不詳）曹洞宗

サルスベリ（普門寺、岩手県陸前高田市）

臺翁寒易和尚は、当寺の第八世。サルスベリは、彼が延宝年間（一六八〇年頃）に中国の天童山から持ち帰り植え

たと伝わる。

淳長（生没年・生誕地不詳）曹洞宗

クロマツ（円成寺、福井県若狭町）

淳長大和尚は、当寺の第一一世。クロマツは、彼が宝暦元（一七五一）年に植えたと伝わる。枝張りが見事なので「見返りの松」と呼ばれている。

良寛（一七五八—一八三二）新潟県、曹洞宗

①ツバキ（円通寺、岡山県倉敷市）、②ボダイジュ（浄念寺、新潟県新発田市）

良寛は一八歳で出家。一二歳から一二年間①の円通寺で修行した。ツバキは、彼が住んだとされる円通寺の覚樹庵にある。②の浄念寺は、真宗大谷派。良寛が何度も訪れたという。ボダイジュは二代目（二〇一〇年頃植樹）。

三、お手植え僧と樹種

先の二章では、お手植えをした高僧四八名と、その伝説を一三九話見出した。伝説上、最初にお手植えをしたのは

行基。伝説と樹木数が最も多いのは空海（二六話、一一樹）、次いで蓮如（一二話、七樹）、行基（一〇話、八樹）、親鸞（二〇話、五樹）である。四八名のうち中世（平安末期から室町時代）の高僧が三二名（六割以上）を占める。伝説の木は高僧の生誕地と来訪地に多く、中国に渡った僧（最澄・空海・宗叡・栄西・円爾など）が持ち帰り植えたと伝わる木（サラノキ・コウヤマキ・ボダイジュ・イブキなど）も確認できた。木が枯れてしまっても根株を保存し、二代目の木を植えるなど、木と伝説を大切に守ってきた様子が窺えた。

左の一覧1は、四八名の僧を宗派別に分類したものである。

一覧1 宗派別に見るお手植え僧

〈宗派名〉 〈お手植え僧〉

法相宗	……	行基
華嚴宗	……	良弁 明恵
天台宗	……	最澄 最仙 円仁 天海
真言宗	……	空海 宗叡 俊寛 実弘 宥日
浄土宗	……	法然 弁長 良如 祐全

臨濟宗 …… 栄西 法身性西 円爾 孤峰覚明

夢窓疎石 元翁本元 寂室示光

本禅等扱 一休宗純 沢庵宗彭

浄土真宗 …… 親鸞 明空 如信 覚如 綽如

蓮如

真言律宗 …… 叡尊

曹洞宗 …… 大徹宗令 雲山 臺翁寒易 淳長

良寛

日蓮宗 …… 日蓮 日朗 日興 日印 日叡

黄檗宗 …… 潮音道海

修験道 …… 泰澄

その他 …… 空也 西行 清秀

日本に大きな宗派が一三宗あり、このうち融通念仏宗と時宗を除く一一の宗派でお手植え僧を見出すことができた。最澄・空海・法然・栄西・親鸞・叡尊・日蓮は各々、宗派の開祖である。宗派の中では臨濟宗の高僧たちに最も多くのお手植え伝説がある。

宗派によりお手植え僧数に多少の差はあるが、各時代を通して高僧にお手植え伝説と樹木が伝存することは、高僧

によるお手植え行為に何らかの意味があり、歴史的に受け入れられるものであったことを表していよう。さらに考察を続けよう。

高僧たちは、どこに何の木を植えただろうか。左の一覧2は、上記調査に基づき、高僧が植えた樹種を地方と都府県に分けて示したものである。

一覧2 都府県別に見る高僧が植えた樹種

〈東北地方〉

青森県 イチヨウ

岩手県 サルスベリ

宮城県 カヤ

秋田県 カヤ

山形県 イチヨウ カツラ マツ

福島県 サクラ ヒノキ

〈関東地方〉

茨城県 イチヨウ カヤ ヒイラギ ボダイジュ

栃木県 コウヤマキ タラヨウ トチノキ

群馬県 キンモクセイ

埼玉県 カヤ サクラ シイ タラヨウ フジ マキ

千葉県 イチヨウ ウメ サクラ ボダイジュ

東京都 イチヨウ

神奈川県 ソテツ ボダイジュ

〈中部地方〉

新潟県 ウメ ボダイジュ

富山県 スギ マツ

石川県 ヒバ(サワラ) マツ

福井県 クロマツ スギ スダジイ トチノキ マツ

山梨県 イチヨウ サクラ スギ トチノキ

ビャクシン マツ

長野県 クロマツ スダジイ

岐阜県 イチヨウ ウメ ギンモクセイ ボダイジュ

静岡県 イブキ スギ マツ

愛知県 イヌマキ クスノキ ボダイジュ マツ

〈近畿地方〉

三重県 ウメ ボダイジュ

滋賀県 ウメ カエデ ギンモクセイ コウヤマキ

サラノキ スギ ボダイジュ マキ マツ

京都府 イブキ ウメ クスノキ サクラ スギ ハギ

ボダイジュ マツ モミジ

大阪府 カエデ

兵庫県 イブキ マツ ワビスケツバキ

奈良県 イチヨウ スギ ボダイジュ ヤナギ

和歌山県 サクラ ナギ

〈中国地方〉

島根県 イチヨウ サクラ スギ

岡山県 イチヨウ スギ ツバキ ボダイジュ

〈四国地方〉

徳島県 イチヨウ スギ フジ マツ

香川県 カヤ クス ソテツ マツ

愛媛県 イブキビャクシン ボダイジュ マツ

〈九州地方〉

福岡県 クスノキ ナギ ボダイジュ

長崎県 クスノキ

上記より、お手植え伝説とその樹木は、特定の地域にあるのではなく、広い地域（北海道と九州中・南部を除く）にあることが判明した。このうち、関東・中部・近畿地方と、滋賀県、京都府にやや多い傾向が見られる。

次に、木を植えた場所に注目すると、一三九件のうち一

二五件が寺院、一〇件が神社、その他が四件で、木の九割が寺院に植えられたことが明らかになった。そして、寺院に植えられた一二五件の木のうち半数以上が、その寺を開山・開基、再興・中興した僧が植えた伝説を持つ。これは立ち木が、寺院の開山・再興者が誰なのかを伝える役割を果たしているといえる。

また右の一覧2から、高僧のお手植え樹種は三八種に及ぶことが判明した。次の一覧3は、それを多いもの順に七位まで示したものである。

一覧3 お手植えの樹種と件数

1位	イチヨウ	……	一二件
2位	マツ	……	一九件
3位	スギ	……	一六件
4位	ボダイジュ	……	一五件
5位	サクラ	……	九件
6位	ウメ	……	七件
	クスノキ	……	七件
7位	カヤ	……	五件

高僧が植えたと伝わる木には、何らかの意味や目的があっただろう。右に挙げた各々の木の特徴と、明らかになったことを記そう。

イチヨウは現在、寺院で見かけることが多いが、お手植えで最も多いのもイチヨウである。最も早いお手植え事例は、行基である。この木は、強風で幹が折れても焼けて空洞になっても、再び芽吹く強健な生命力を持ち、木も落ち葉も水分を多く含んでおり、燃えにくく防火の役目を果たす。お手植えイチヨウにも戦火・火災・災害をくぐり抜けてきた木がある。樹高が高くなり、イチヨウがある寺院は遠くからでも見つけることができる。イチヨウは古くから寺院を表す目印的な役割を果たしてきたと考えられる。幹や大枝から乳と呼ばれる円錐形の気根を生じ、それが安産や子育て信仰に結びついている。東北地方では落葉すると根雪になると言い、またギンナンに命を救われた話も伝わり、イチヨウの木が人々の生活にとけ込んでいる。

二位はマツ。マツは、神を待つ・祀るが転じた語で神が宿る樹とされる。色名に千歳松、常盤松があり、これは松葉のような緑色のこと。年中青々とした葉をつけるマツは、不変と不老長寿の象徴である。マツを最初にお手植えした

のは行基、次いで空海。法然・日蓮は、仏教の末永い繁栄を祈念して植えた。

三位はスギ。スギの名は、真つ直ぐな木に由来する。北は青森から南は屋久島まで分布する日本固有種で、香木。スギを最初に植えたのは行基、次いで泰澄。最澄・空海・日蓮らは、祈願を込めて植えた。

四位はボダイジュ。この木を最初に植えたのも行基、次いで空海。宗叡・栄西は中国から持ち帰って植え、親鸞・蓮如は種を植えたと伝わる。寺院にボダイジュを植えたのは、釈迦がこの木（インドボダイジュ＝インド原産のクワ科イチジク属の常緑高木）の下で悟りを開いたことに因む。ただし日本でボダイジュといえば、葉の形がインドボダイジュに似ている、中国原産のボダイジュ（シナノキ属の落葉高木）である。

五位はサクラ。最初にお手植えをしたのは西行。日蓮は母の蘇生記念、夢窓疎石は母の菩提を弔い植えた。品種は、寿命が長いエドヒガンが多い。お手植え木の中には、現在も農作業の開始を知らせる役割を果たしているものがある。

六位はウメとクスノキ。ウメを最初に植えたのは親鸞。日蓮は父の冥福を祈って植えた。ウメは冬に花を咲かせる

ため、マツ・タケと並びめでたい木とされる。刈り込みや剪定に強いが、実を植えて育てるのは難しく、開花には挿し木か接ぎ木による苗作りが必要。

クスノキを最初に植えたのは行基、次いで空海。場所は神社で、御神木になっている。クスノキは、関西以西に分布する常緑高木。暖地では特に生育し、国内の樹木の中で最大級。香木で、材と葉から樟脳（防虫剤の成分）が得られ、虫が付きにくく腐朽しにくい。大木になるため、古代から建造物や船材、仏像彫刻に多用された。

七位はカヤ。これを最初に植えたのは空海。種を植えたと伝わる。材は緻密で光沢と芳香があり、水や湿気に強く、古くから仏像彫刻や建築材に使用されてきた。芳香は虫除け、実は食用になる。

四、高僧が植えた木と木彫仏の樹種は共通する

飛鳥時代から江戸時代に造られた木彫仏の樹種

日本で木彫仏が造られるようになったのは、七世紀以降。七世紀の木彫仏の樹種はクスノキであったが、八世紀にカヤへと変化した⁽¹³⁾。その理由は、中国の唐時代に壇像^{だんざう}（白檀^{びやくだん}）

など特有の芳香がある木で造った像）が造られるようになるのだが、ビャクダンの原産はインドや東南アジアで、日本には自生せず入手困難であったため、カヤを代用したのである。

多くの樹種がある中で、木彫仏が黄楊や檀などではなく、クスノキやカヤで造られたことは、木彫仏に使用する樹種（御衣木）に決まりがあったことを表している。クスノキとカヤは常緑樹で樹幹が大きく育ち、木には特有の芳香がある。しかもカヤは日本固有種で、東日本から九州に天然分布し、材は緻密で腐りにくい。ビャクダンとは、彫刻用としては材が小さく小さな像しか作れないが、カヤは材が大きく大きな像の制作が可能である。

大阪市立美術館で開催された特別展「木×仏像―飛鳥仏から円空へ 日本の木彫仏1000年」（平成二九年）は、七世紀の飛鳥仏から江戸時代の円空に至る千年の木彫仏の歴史を辿り、素材と技法に焦点をあてた展覧会であった。その展覧図録の解説文から、木彫仏三四体の樹種を知ることができる。以下に、時代ごとの仏像数と樹種を記そう。

飛鳥時代の仏像二体はクスノキ、奈良時代の三体はカヤ、平安時代の一五体はカヤ・ヒノキ・センダン・ケヤキ・サ

クラ・ビャクダン、鎌倉時代の九体はヒノキ・カヤ・サクラ・マツ、南北朝時代の一体はヒノキ、江戸時代の四体はヒノキ・マツで造られている。これをわかりやすく、一覧4で示そう。

一覧4 飛鳥時代から江戸時代の木彫仏の樹種と仏像数

ヒノキ	一八体	カヤ	六体
クスノキ	二体	ケヤキ	二体
サクラ	二体	マツ	二体
センダン	一体	ビャクダン	一体

右の一覧4より、飛鳥時代から江戸時代の木彫仏三四体は、八種の木で造られていることが明らかになった。このうち、ケヤキとセンダン、ビャクダンを除く樹種が、一覧2・3で示した、高僧がお手植えをした樹種と共通するのである。これは、高僧が植えた木と木彫仏に用いる木が同等のもので、高僧が植えた木は仏像と同様に神聖なものであるという認識を示唆するのではないだろうか。

一岐阜県千光寺の立木仁王像（寺や仏教を守る守護神）は、円空（一六三二―九五）が、切り出した木材ではなく、地

面に生えたままの立ち木（樹種は栓^{セン}の木^{ノキ}針桐^{ハリギリ}とされる）に彫刻したものである。『近世畸人伝』に、立ち木に梯子をかけて鉈^{なた}を振るい仁王像を彫る姿が描かれている。⁽¹⁵⁾この事例は、立ち木⁽¹⁶⁾神仏像の關係にあり、立ち木には神仏が宿っており、その木は像を彫るにふさわしい神聖なモノとする認識が表れている。

五、高僧はなぜ木を植えたのか

聖なる木を伐ることが容易ではなかったことは、『三国伝記』（室町中期）の以下の話から窺える。⁽¹⁶⁾近江国にある栗の巨樹が若狭国まで影を成し、若狭国では田畠が作れず木を伐るのだが、夜のうちに切り口がぐくつてしまう。そこで草が「コケラ（栗の木を伐った時に出た木屑）を火に焚けばよい」と教え、人々が試すと伐り倒すことができたという。これは、木つ端や木の削り屑にさえた木の霊・山の神霊が宿っており、それらと決別する儀式（火によって他界に送り再生を期す）が必要だったことが表れている。

一方で、開発優先の社会において多くの樹木が伐採されてきたことは、次の史料から窺える。⁽¹⁷⁾仁安三（一一六八）

年、金山寺（岡山県・天台山）は備前国留守所に、「役人と百姓らが寺内の樹木をことごとく伐採して用いるので、樹木が堂舎の辺だけになってしまった。仏法興隆、御願成就のため木を伐り取ることを禁止してほしい」と訴え、また文永一〇（一二七三）年に西明寺（滋賀県・天台山）は関白家政所下文で、「霊木伐採が続けば、野火に対して樹林が防火の役割を果たせなくなる」と嘆いている。

寺院は、開発進行に対して伐採禁止を強く打ち出さなければならなかったが、仏教勢力の強大化に伴って寺院を建立し、そのためには山の木が必要であった。右記の金山寺は「寺内の樹木は仏陀莊嚴、神明嚴饒の料である」と言い、金剛寺（大阪府・真言宗）は「山は草木を以て莊と為し…草木無くんば則ち泥丸の如し」、弘法寺（岡山県・真言宗）は「寺院の饒^{かざり}は山木あるを以て宗となす」と言い、ここに寺院側の樹木観や論理が表れている。

史料にある莊は莊嚴、つまり飾りのこと。仏教において莊嚴は非常に重視され、仏身を宝冠・装身具・瓔珞・天蓋・光背・台座などで飾り、仏殿や伽藍内部（仏が坐す場所）も飾って仏国土を表現した。寺院とその周辺の樹木は、この莊嚴飾りの延長上にあり、これらのすべてを包摂するも

のとして位置づけられていた。樹木を神仏の莊嚴とする認識が、民衆たちによる開発と伐採に歯止めをかける力として強く機能していたのである。

建長三（一二五一）年、興福寺では春日社の参道に桜と柳を植えて守り育てる決定を下し、六八名の僧が署名している。室町時代には、学僧が里人に猿沢池周辺に松などの木を植えさせており、中世に僧主導による寺社の莊嚴化・聖域化が進行した。また、江戸時代以前から「樹根掘取の禁」、つまり松や小柴などの木の根を掘ることが畿内近国に限らず禁止されていた。文禄の頃、豊臣秀吉は方広寺大仏殿の造立などで大量の樹木を伐採したが、一方では大仏殿の周りを松で飾るため京周辺の大社寺に松の苗木を育てるよう命じている。天竜寺は三万本の苗木を請負い、一万本が生長して差し出せることを奉行所に伝えている。

高僧は、寺院の開山・創建・再興にかかわる。寺建立のために山の木を伐り用いなければならなかった。木を伐る償いとして、高僧たちが一定の樹木を植える義務を負っていたのであろう。

また、枯稿ここうという現象に注目しておきたい。⁽¹⁸⁾これは、草木が枯れることである。中世に摂津国の大社・広田社をは

じめ、特に大和国の春日社では春日山と周辺の木が何千本も枯れた。人々は、山木枯稿を神の怒り・崇りの現れであり、神がなだめられ怒りが解けると青葉がもどってくると考えていた。樹木の枯れ＝異常事態＝神の怒りの表明であり、樹木の青々とした繁茂＝正常な状態＝神の平穏な心の表明だったのである。

寺社に木を植えることは、神仏が降り立つ場を作ることであり、寺社と周辺の山々が青々として樹木が茂っていることは、秩序と平和の象徴であった。高僧が植えたと伝わる樹齢何百年もの木が今なお日本各地に多く残されているのは、僧と民衆が神仏との折り合いをつけながら、木を伐ってはいけないというタブーを残す形で開発を進めて行った名残なのであろう。

おわりに

本稿で明らかにしたことをまとめておこう。

一章で、伝説上初めてお手植えをしたのはスサノオノミコト（樹種はクスノキ）と特定し、また鎌倉時代以降、中国から種や苗を持参して植えた来日僧の存在も明らかにし

た。

二章では、文献や寺社のホームページ、フィールドワークなどにより、お手植え伝説がある高僧四八名、伝説一三九話、彼らが植えたと伝わる樹種三六種を見出し、高僧と木、それを植えた場所の関係を探った。伝説上最初にお手植えをした僧は行基。伝説と樹種数が最も多いのは空海（二六話、一一樹種）。伝説の木は僧の生誕地と来訪地に多いこと、中国から種苗を持ち帰り植えた留学僧（最澄・空海・宗叡など）の事例も明らかになった。

三章では、一一の宗派でお手植え僧を見出した。お手植えの木が日本各地に生育していること、植えた場所はほぼ寺院で、その開山・再興時に植えたとする伝説が大半を占めること、三六の樹種のうちイチヨウ・マツ・スギ・ボダイジュが多いことを明らかにした。

四章では、高僧が植えた木と木彫仏に使用された木に、共通の樹種があることを指摘。立ち木が木彫仏と同じ聖なるモノとして認識されていたのではないかと推測した。

五章では、瀬田勝哉の研究成果（中世の木の社会・文化史）を取り入れ、高僧たちが木を植えた伝説の意味を考察した。寺社とその周辺に木を植えることは、神仏が降り立

つ場を作ることであり、青々と茂った樹木は、神仏の平穏を意味するものであった。また、寺院に植えられた樹木には莊嚴（仏像や仏殿を厳かに飾るもの）の役割があったことを論じた。

高僧が木を植える事例は、江戸時代に減り明治時代以降はほぼ見られなくなる⁽¹⁹⁾。これには、明治以降の愛林・植樹・緑化運動の影響があるだろう。明治二八（一八九五）年に「学校樹栽日」が定められ、学校林の設置や造林が重視されるようになった。同四四年に「植樹日」、昭和九年に「愛林日」が定められ、同一三年には国家行事となつて全国的に愛林運動が展開した。戦後は「全国植樹・育樹祭」と名を変えて天皇・皇后が参加するものとなった。古代から近世に高僧主導による寺院周辺への植樹行為が、明治期に政府によつて学校や市町村へと移り、現在の植樹は皇族が主導となつて全国に及んでいるといえる。

注

- (1) 徳川家康のお手植えに関して、芦川美帆ほか四名が著した「家康公お手植えミカン」は紀州ミカンなのかーゲノム分

- 析で謎に迫る」(『生物の科学遺産』エヌ・ティーエス、二〇二一年)がある。
- (2) 拙稿に高僧の生誕伝説を考察した「高僧誕生のしるし—古代から現代まで続く偉人誕生のストーリー—」(龍谷大学『国文学論叢』六一輯、二〇一六年)がある。
- (3) 高僧以外の偉人たち(たとえば楠木正成や豊臣秀吉など)のお手植え伝説、また高僧や偉人の「杖立伝説」と「箸立伝説」(所持した杖や食事に用いた箸を地面に挿し、それが根付いた伝説と樹木)については別稿とする。
- (4) 伝説と樹木は、以下の文献から収集した。日野巖『植物怪異伝説新考』(有明書房、一九七八年)、『京の木 歴史のなかの巨木名木』(京都市文化財ブックス第一集、一九八六年)、武村俊則『京の名花・名木』(淡交社、一九九六年)、渡辺典博『巨樹・巨木日本全国六七四本』(山と溪谷社、一九九九年)、大貫茂『日本の巨樹一〇〇選』(淡交社、二〇〇二年)、渡辺弘之『京都神社と寺院の森』(ナカニシヤ出版、二〇一五年)。また「名木伝承データベース」(銘木総研株式会社、二〇二四年)なども参照した。
- (5) 聖徳太子は、木を植える一方で伐採もした伝説を持つ。京都祇園祭の山鉾「太子山」の御神体は聖徳太子で、手に斧を持つ。四天王寺建立のため自ら山に入り杉を伐採する姿である。
- (6) 上記の他に、オチノミコト(クスノキ、大山祇神社・愛媛県)や景行天皇(クスノキ、福岡県築上町)、日本武尊(サクラ、實相寺・山梨県)、応神天皇(シンパク、宝生院・香川県)、継体天皇(サクラ、岐阜県本巣市)など、日本神話に登場する神や古代の天皇にもお手植え伝説とその樹木があることが判明した。
- (7) 鶴岡八幡宮のビャクシンは、源実朝が宋から苗を取り寄せて植えたものと伝わる。実朝は宋に憧れ、渡宋するための大型木造船を建造したことも知られる。
- (8) 根本誠二『行基伝承を歩く』(岩田書院、二〇〇五年)参照。
- (9) 茨城県筑西市にある最仙の生家・茶花家の案内板による。
- (10) 坐禅の様子は、絵画「明恵上人樹上坐禅像」(国宝、高山寺蔵)で知られる。
- (11) 末尾に「高僧が植えた伝説がある樹木一覧」を掲載した。
- (12) 辻井達一『日本の樹木』(中公新書、中央公論社、一九九五年)、同『続・日本の樹木』(同、二〇〇六年)、渡辺一夫『公園・神社の樹木』(築地書館、二〇一一年)参照。
- (13) 金子啓明など著『仏像の樹種から考える古代一木彫像の謎』(東京美術、二〇一五年)参照。
- (14) 大阪市立美術館編『特別展 木×仏像』二〇一七年による。

(15) 「袈裟山（岐阜県千光寺）にも立ちながらの枯木をもて作れる二王あり」を描いた挿図による。仁王像は、一五〇年前に木の根元が腐朽したため、現在は切り取って円空仏寺宝館に安置されている。

(16) 瀬田勝哉編『木』の語る中世』（朝日百科日本の歴史別冊、朝日新聞社、一九九五年）、瀬田勝哉『木の語る中世』（朝日選書六六四、朝日新聞出版、二〇〇〇年）参照。

(17) 注（16）に同じ。

(18) 注（16）に同じ。

(19) 大正時代末期に、黄檗宗萬福寺の僧・山本悦心（一八七五—一九五八）が、中国の黄檗山から黄檗の種を取り寄せ、発芽させて苗木を植えた事例が知られる。

(20) 日本森林学会編『森林学の百科事典』（丸善出版、二〇二一年）参照。

高僧が植えた伝説がある樹木一覧

ア行 イチヨウ、イヌマキ、イブキ、イブキビヤクシン、ウメ

カ行 カエデ、カツラ、カヤ、キンモクセイ、ギンモクセイ、クスノキ、クロマツ、コウヤマキ

サ行 サクラ、サラノキ、サルスベリ、サワラ、シイ、スギ、スダジイ、ソテツ

タ行 タラヨウ、ツバキ、トチノキ

ナ行 ナギ

ハ行 ハギ、ヒイラギ、ヒノキ、ビヤクシン、フジ、ボダイジュ

マ行 マキ、マツ、モミジ

ヤ行 ヤナギ

ワ行 ワビスケツバキ

（本学非常勤講師）

【キーワード】

高僧 お手植え 樹木 伝説